

中學  
西洋歷史

文學士 廣田直三郎編

教科書院發兌



緒言

一、本書ハ單ニ西洋諸國盛衰興廢ノ大要ヲ知ラシムルコトニ止マリ、東洋、南洋、アフリカニ關スル件、其他詳細ナルコトハ、之ヲ更ニ上級ニ於テ科セラルベキ西洋史ニ譲リ、本書ハ煩ヲ避ケテ之ヲ省ケリ、

一、一週一時三十五週三十五時、每週二頁余ノ豫定ナリ、教師ハ適宜ニ補修シ、又充分ニ説明ヲ與フルヲ得ベシ

明治三十二年十二月

編者識

# 中學西洋歷史目次

緒論.....一

第一 西洋史の範圍.....二

第二 西洋史の年代.....二

第三 西洋史の區劃.....三

## 太古史

太古史の範圍.....五

第一章 埃及.....五

第二章 西部亞細亞諸國.....七

第一 ユダヤ.....七

### 上古史

#### 上古史の範圍

第二章	フィンニシヤ	九
第三章	バビロニヤ及アツシリヤ	一〇
第四章	リヂヤ、メヂヤ、ペルシヤ	一一
第二章	希臘	一三
第一章	紀元前五世紀以前	一五
第二章	波斯戰爭	一七
第三章	ペロポネソス戰爭	一八
第四章	希臘之文物	二〇
第五章	アレキサンダー大帝の事業	二二

### 中世史

#### 中世史の範圍及性質

第二章	羅馬	二三
第一章	共和政治時代	二三
第二章	以太利統一時代	二四
第三章	ピユーニツク戰爭及四方征服	二五
第四章	内亂時代	二七
第五章	帝政時代	二九
第一章	フロンク王國の建設	三二
第二章	サラセン帝國の勃興	三三
第三章	耶蘇教の盛大	三四

第四章 十字軍……………三五

第五章 封建制度及騎士……………三六

第六章 獨佛其他各國の有様……………三八

第七章 中世末期の有様……………四〇

第八章 中世の文明……………四二

### 近世史

近世史の發端……………四三

第一章 航海術の發達及其結果……………四三

第二章 羅馬教改革騒動—耶蘇教三派……………四六

第一 和蘭國獨立……………四九

第二 西班牙國の盛衰……………五〇

第三 英國の隆盛……………五一

第四 三十年戰爭……………五二

第五 佛國の霸權時代……………五三

第三章 英國大革命及王政復古……………五四

第四章 露西亞の勃興……………五六

第五章 普魯西の勃興……………五六

第六章 北米合衆國の獨立……………五七

第七章 露西亞の膨大波蘭の滅亡……………五八

現代史……………六〇

現代史の發端……………六〇

第一章 佛蘭西大革命……………六〇

第一章 革命の原因……………六〇

第二章 王政顛覆……………六二

第三章 共和時代の佛國及列國の情態……………六五

第二章 ナポレオン一世時代……………六七

第三章 佛國大革命の影響及反動……………七一

第一 大革命の結果……………七一

第二 神聖同盟……………七一

第三 奧國の隆盛……………七二

第四 南米の獨立……………七三

第五 英國の情體……………七五

第六 希臘の獨立……………七五

第七 佛國の情體及七月革命……………七七

第四章 七月革命の影響……………七八

第一 白國獨立……………七八

第二 奧普兩國の消長……………七九

第三 土埃事件……………八〇

第五章 佛國二月革命……………八二

第六章 二月革命の影響……………八二

第七章 佛國第二帝政及クリミア戦争……………八四

第八章 以太利統一……………八五

第九章 北米合衆國南北戦争……………八六

第十章 普國の勃興—獨逸帝國の再興……………八八

第一 普王ウイリヤム一世ビスマルク、モルトケ八八

第二 塙普戦争……………八八

第三 普佛戦争……………九〇

第四 獨逸帝國の復興……………九一

第十一章 露土戦争……………九二

第十二章 三國同盟―露佛同盟―新三國同盟……………九三

第十三章 現代の文明……………九五

# 中學西洋歴史目次 終

## 中學西洋歴史

文學士 廣田直三郎 編

### 緒論

西洋史の性質  
 歐米各國に起れる興亡盛衰を説述するものなり、西洋史は之を國史に比すれば、頗る煩雜を極め、場所の廣大と事變の夥多なるとは、初學者の頭腦を苦しむると特

場所と年代 には心得べきとなり、今本文に入るに先ち此点に付て一  
 二の注意を與ふべし

### 第一 西洋史の範圍

西洋史にて説く所は獨り歐洲各國及北米合衆國に限られざして、亞細亞の西部及亞非利加の東北部(埃及)の地をも含むなり、蓋し歐米開明の淵原は此等諸國より由來するもの少なからず、而かも全ト白色人種に属したるが故なり、是を以て西洋太古史は此等諸國の歴史に始り、漸次歐洲本土に及べり

### 第二 西洋史の年代

西洋史年代の數へ方は、各國を通トて一定の標準あり、則ち基督教の開祖たる耶蘇基督の誕降年を紀元元年として前後に數へ及ぼすなり、

世紀とは百年の義よて歴史上常に使用せらるゝ、文字なり、其呼方は紀元元年よりはトめて第一百年迄を第一世紀とし、以下百年毎に世紀の數を加ふ、又紀元前一年より遡て第百年迄を紀元前第一世紀と云ひ以上之ヲ準き、之を表に顯せば



又從て百年間を一世紀、二百年間を二世紀とも唱ふるなり、

### 第三 西洋史の區劃



便宜の爲め西洋史を左の五つの時代に分つ、

太古史 太古より紀元前第五世紀迄

上古史 紀元第五世紀迄

中世史 紀元第十五世紀末期迄

近世史 紀元第十八世紀末期迄

現代史 現今に至る

### 太古史

#### 太古史の範圍

緒論に畧述せる如く、西洋史の太古史は、歐洲本土にあらずして埃及及西部亞細亞の諸國の歴史なり

#### 第一章 埃及

開明の度、埃及は世界最古の文明國にして、其歴史は、紀元前三千年の昔に始まり、此れ全く此國にある「ナイル」と云へる大河の賜にして、此河毎年夏秋の候に際し溢れて兩岸數里の地を沒し豊肥なる泥土を留めて引退するを以て、民勞少くして收むる所多ければ開明の早かりしも理りなりかし

政体及興亡、國王ありて世襲し、獨裁專制の權あり  
 王朝は數回の變動ありしも、紀元前十五六世紀より十  
 二世紀の間は埃及極盛の時代にして勢威遙かに西方  
 亞細亞に及びしが、紀元前六世紀の比波斯國に滅せら  
 る、

族制及宗教、四階の族制ありて最高を僧侶とし、次  
 を武士、次を商工、最下を農とす、其制儼然異族相婚する  
 を禁ぜり、僧侶の上に國王あり、之をファラオと云ふ、日、神  
 の子の義なり、宗教は靈魂不滅の説を信し、木乃伊と  
 なして屍体を保存し、日月及動物を崇拜する奇風あり、  
 文字及技術、埃及にはヒエログラフと云へる象形

文字ありたり、建築及彫刻は其長技にして殊に建築  
 は宏壯を極め、今日尚ナイル河兩岸に幾多散見せる巨  
 大の金字塔の如き、皆太古埃及人の遺物たり

## 第二章 西部亞細亞諸國

### 第一 ユダヤ

位置、ユダヤは地中海東濱の一小地にして、北緯三十  
 一度半より三十三度半に至り、東經五十二度より五十  
 四度に及ぶ、南方に死海ありて、シヨルダン河之に注ぐ、  
 南は亞刺比亞を控へ、北はフイニシヤに接す、

開明の度、もとカルデヤに住せしが紀元前二千年頃  
 此地に來りしものよて、後一旦埃及に移りしが、紀元前

十三世紀の頃復歸り住せり、  
 政体及興亡、 國內十二種族に分れ結合甚た鞏固ならず、政治は高僧ありて、此れを司り別に王を置かざ、各族皆族長の統御に任せり、外難頻りに至る時は士師を戴て、之に當れり、紀元前十一世紀頃より初めて王を立てたり、サウル、デビッド、ソロモンの名王相繼て即位せしが、ソロモンの崩後、國二分し、北方十族をイスラエル、南方二族を猶太國と云ふ、イスラエルは紀元前八世紀アツシリアに猶太國は六世紀バビロニアに滅せらる、  
 宗教、 此國の宗教は、所謂猶太教にして、四圍多神教徒中に屹立して固く一神教を奉せり、後年耶蘇基督此國

のベスレヘムに生れ耶蘇教を開始せり、  
 文學、 詩歌箴言に長トソロモン王の讚美歌の如き其粹と云ふべし、亦音樂に妙を得たり、

### 第二一 フイニシヤ

位置、 東レバノン山を貫ひ、西地中海に瀕する狹長の小地なり、良港多く、薪材に富むも、地質礫確たり、  
 政体及興亡、 紀元前十六世紀の頃に創建せられ、各市皆獨立の君主を戴き、只緩急の際連合せり、前六世紀バビロニア國に併吞せられたり、  
 生業及殖民、 夙に航海の術に達し、交易を業とし、地中海沿岸至る處に殖民地を作り、一時大に富國となれり、

文明交通、聲音文字の創作者なりと稱せらる。造船術、染織の技に達せり、陸は隊商より海は船舶により、印度よりシブラルタルに至る交通の衝に往來したれば、東西文明交換の媒介をなせしと少々にあらず。

第三 バビロニア及アッシリア

位置、ユーフレートツナグリヌ兩河合して波斯灣に注ぐの邊にバビロニア國ありたり、其上流ナグリヌ河東の地をアッシリア國と云ひま。

政体及興亡、専制の君主あり支配せり、バビロン國は紀元前二千年の比創建せらる、七世紀を経てバビロニア人の北方にある者アッシリア國を建てしが遂に紀元

前七百十年バビロニア國を合し更にユダヤ、埃及、メヂヤ、リヂヤを取れり、後百年新バビロニア國起りて又之を合せしが紀元前五百三十八年波斯國、此兩國の地を併吞せり。

文明、バビロン及ニネヴの兩都は其壯大なるを今の倫敦にも優りたりと云ふ、建築、彫刻、數學、天文、農業、皆其長技にして、楨形文字を有し、又廣く商業を營めり。

第四 リヂヤ、メヂヤ、ヘルシア

位置、リヂヤは小亞細亞の西部に位せる一小國なり、メヂヤ及波斯は共にバビロニア國の東、即ち今の波斯國の地にあり。

興亡、リヂヤは紀元前七八世紀の頃より其歴史を有せり、一旦アツシリア國に滅せられ後、獨立せしが六世紀の頃、波斯國に合せらる、メヂヤ及波斯は更に古くより顯はれ、亦嘗てアツシリア國に合せられしが紀元前八世紀メヂヤ先づ獨立し波斯をも合せ有せしが紀元前六世紀波斯にシラス王起り、メヂヤを併吞し、更に兵を四隣に用ひ、子カムビセス其遺業をつぎて又版圖を廣め、遂に埃及を滅するに至れり、次王ダリアス賢明しめて頗る治績あり、國內を二十區に分ちて各々知事を置き、驛遞制度を布き、道路を修築し、貨幣を定むる等大に波斯の文明を進めたりしが其希臘と葛藤を生ずる。

至りて大に挫折したり(西洋史の太古史は此希臘侵撃を以て終となす)次王暗愚傲慢希臘を侵して大敗し其次王の世マセドニヤ國に滅せらる(紀元前四世紀)文明、波斯人は質朴勇健最も武人に適せり、建築及手藝に卓絶し、文學亦頗る發達せり、地中海と印度との中間に挾まれば、隊商常に往來し、商業從て盛なりき、ダリアス王の治政は殊に後世政治家の稱賛する所なり、

## 上古史

### 上古史の範圍

上古史に顯はるゝものは希臘と羅馬の二國なり、

### 第一章 希臘

位置地勢及國体、歐洲の南部に斗出せる三半島の最東に位し、其版圖は現今の希臘國と大差なし、只其盛時地中海沿岸の各地に大なる殖民地を有したるを異にするのみ、全國至る所山嶽疊々すれども港灣に富み島嶼極めて多く航運に便なり地勢三大部に分る、北部は二州中部は九州ありて南部は更に一半島をなす七州に分る、凡て十八州皆獨立して別政府を有し、全國を通つての君主又は政府なし、然れども一朝外敵に遭ふ時は全國皆團結して之に當るの美風ありき、各州皆大なる市府あり其州の中心をなす、全希臘中其最大なるものをアツナカ州のアゼンス、ラユニヤ州のスパルタと

なす、希臘の歴史は殆んど此二市の歴史と云ふも不可なし、

### 第一 紀元前五世紀以前

希臘史の太古はホーマー時代と云ふ種々の神話怪説を以て充てり、紀元前千百年頃ドリリア人移轉なるものあり、此れは元と北部に住めるドリリア人が漸次南侵して南部半島を占有したるを以て、此が爲めアケイ人エオリア人は北方に逃れたり、ドリリア人此より南部に繁盛せしがスパルタ市人は其標本たりイタニア人は中部に遁れしが次第に隆盛となりアゼンス人其代表たり、スパルタの勃興、スパルタ市人は在來の土人を服

從せしむる爲に全市皆兵の主義をとり、男子七歳より至れば皆公立の演武所に寄宿し、武を錬り神を養ひ粗食に安んじ勞苦に堪へしむ、蓋しリカルガスと云へる人の遺法なりと傳ふ、スパルタは此れより大に隆盛に赴き紀元前七世紀の頃は全く其州内を壓服し、進て希臘全土の覇たらんとせり、

**アゼンスの勃興**、アゼンスはスパルタの軍隊的主義に反して大に民主個人主義をとり學問美術財産商業を重んじ議會を設け又盛に人傑を出せしがソロンと云へる人最も顯はる、紀元前七世紀頃よりアゼンス頗る強大となり中部希臘に雄視せり

## 第二 波斯戦争

**原因** 小亞細にある希臘殖民地其領主より反きしがアゼンス人之を救ひ更に進んで波斯領を荒したれば波斯大に怒りて希臘征討の師を出せり、  
**第一戦争**、紀元前四百九十二年波斯王其將を遣はし海陸より希臘を征して效なき

**第二戦争**、波斯王ザキザレス大舉親征す兵二百萬と號す希臘軍サーモピーレの嶮に敗れしも、アゼンス人の據れるサラミス島附近に波斯軍を撃破したれば波斯王は倉皇歸國せり(紀元前四百八十年)  
**結果**、此後數回の戦争は皆希臘軍の勝利に歸せり、紀

元前四百四十九年波斯は全く斷念して歐洲の地を去れり、此れより希臘の勢威大に振ひ就中アゼンス最も強盛を來たせり、

### 第三一 ペロポネチソス戦争

原因、波斯戦争以後のアゼンスは實に文化の隆盛を極め全希臘の覇權を握れり、有名なる政治家ペリークルス此間に出でたればペリークルス時代と稱せらる、アゼンス此れより頗る傲慢となり屢々無禮を列國に加へたれば大に輿望に背き遂に些々たる事件よりスパルタ國の乗る所となり兩國戦を交ふるに至りたり、兩國は各同盟を作り遂にはイナニアン、ドリアン兩人種の

争闘となれり(紀元前五世紀)其戦争地の主に南部半島

(ペロポネチソス)にありたれば此名あり、

戦争の経過及結果、アゼンスは海軍にスパルタは

陸軍に各其長所を異にすれば勝敗遽かに決せざりしがスパルタ遂にアゼンス海軍を全滅し進て市府を圍みたれば市民已むなく和を請ふに至れり、此れよりスパルタ代て全希臘の牛耳を執れり、

其以後、久しからずしてスパルタ又暴虐を極め大に列國の惡む所となれり、アツナカの隣國ペオシヤにあるセベス市は一旦スパルタに壓服せられしがエバミノンダス、ペロピダスの二名將出るに及び大に同盟を募



リスパルタ軍とリュクトラに戦て大に之れに克つ紀  
元前四世紀久しからきてセベス又衰ふ此れより希  
臘全國互に其覇を争へり、

第四 希臘の文物

希臘は實に歐洲文化の遠源地と稱せらる、太古史に述  
べたる歐洲外の文明國より感化を受くる處ありと  
雖とも能く之を國風に化するを得たり、其特得の技  
能は彫刻と建築にして彫刻の如きは古今獨歩と稱せ  
らる、哲學又其光輝を放ちソクラテス、プラト、アリス  
トートル等師弟相繼て希臘哲學を大成せり、詩歌繪  
畫より競車競馬戲曲角力に至るまで發達せざるはな

かりき、而して其極盛は先づペリクルス時代を推すべし

第五 アレキサンダー大帝の事業

希臘の北隣にマセドニア國あり希臘の各國其主權を  
争ふの頃に當り其王フィリップ起りて巧に其間に出入し  
漁夫の利を獨占し是れよりマセドニアは全希臘の覇  
主となれり、子アレキサンダー大帝立つや直に精兵  
三万五千を提げて小亞細亞に入り進んで波斯を滅し  
希臘の深仇を報ぜり、之れより長驅して印度に侵入し  
印度河に及び遂に軍を旋して都をバビロンの古都に  
移し版圖西亞及東南歐洲に跨り勢威頗る盛なり紀元  
前三百二十三年、三十三歳を以て崩せしが其大國は忽

ちにして四分五裂せり、  
此れより希臘國は愈紛擾を極め止まる所を知らざり  
しが此間西隣羅馬國次第に隆盛となり紀元前百四十  
六年全く希臘を合併して其大版圖の一州となせり、

### 第二章 羅馬

羅馬史特性、希臘の小邦併立せるに反して羅馬は唯  
一の市府(國にあらず)より起れり、此故に後年隆盛の域  
に達し四隣を服し全以太利を合し遂には未曾有の大  
版圖を有するに至るも當初市府の感念を脱せざるの  
情着々見るべし、此れ大に普通の國々と趣を異にせる  
處なり、

位置及起元、歐洲の中央より斜に地中海中に突出せ  
るを以太利と云ふ、以太利半島の中部に羅馬府あり、此  
れ則羅馬大帝國の起源地なり、紀元前七百五十三年此  
市の建設を以て此國の起元とす、

國初よりの政体變遷

王政 紀元前七百五十三年より全五百〇九年迄

共和 紀元前二十七年迄

西羅馬帝國 紀元四百七十六年滅亡

東羅馬帝國 紀元千四百五十三年滅亡

而して上古史は西羅馬帝國滅亡を以て終る

### 第一 共和政治時代

政治上の紛争、羅馬は建國の當初より貴族と平民の二階級に分れたり平民はもと參政の權なく從軍の義務あり又多く負債を貴族に有し利率高く償還法極めて苛酷なるより平民遂に堪ふるゝあたはず此れより紛争絶えざること四百年、其間平民の羅馬府を退去したるゝ二回に及びしが遂に全く平民黨の希望を達して全市民皆全一の權を得るに至れり、

### 第二 以太利統一時代

羅馬は其市府附近の小區域を有するのみにて之を出づれば忽ち外國たり、故に早くより此外敵と葛藤を生じ干戈を交へて屢勝敗あり然れども漸次附近の全種

族なる諸市を征服し北方のエトルリア人及ガウル人と戦勝ち東隣のサムナイトを亡せり此に於て羅馬は進んで南に下り當時以太利南岸に殖民せる希臘人の殖民地を侵し之をも合せ領しぬ時に紀元前二百七十年頃なり、

### 第二 ピューニック戦争及四方征服

原因、亞非利加大陸の北海岸今の突尼斯府附近にカイセイジと云へる一大港市ありき、もとフィニシヤ人の殖民なるが本國亡びても尙盛大なる貿易を營み地中海各地に殖民地を有し無數の商船と軍艦とを有して海上に跋扈せり、今や羅馬は殆んど全以を合せ全勢を

南方に張らんとす、兩大國は地中海を隔て、相對するに至り到底衝突を免れず、紀元前二百六十四年シ、リ島に紛争ありしに兩國各其一方を助けしより忽ち兩國直接の戦争となりたり、此をピニーニツク戦争と云ふ經過及結果。此戦争は凡そ三回に及びしが一、二回とも羅馬の勝利に歸し第三回に至り羅馬人遂に全くカ  
 ーセーシを滅し市民殆ど殺戮せられたり(紀元前二百六十四年一、一百四十六年)  
 四方征服。此間羅馬人は東方に其版圖を擴張し、カ  
 ーセーシ滅びて後愈進んで希臘を併吞し更に亞細亞亞非利加に及べり、

羅馬人が此廣大なる土地を治るには本國より統治官を派遣し重要なる地には市民を殖民せしめ平坦なる軍道を開きて緩急相應接せしむ

#### 第四 内亂時代

貧富の争、内部の紛争は尙ほ已まき、貴族と平民との争漸く取まれは變つて貧富の軋轢となれり、グラッカス兄弟出でて、大に貧民黨の爲に盡力せしむ共成功せず、富民黨のサラと貧民黨のマリアスと各其黨の首領として相争ひ、サラが亞細亞征討の不在中に其黨マリアスに殺さる、サラ歸國すればマリアス已に卒しぬ、即ち其黨類を殺しぬ此れ紀元前一世紀の始めなり、

第一三雄同盟、サラの死後各黨相争ひしがシーザー、ポンペー、クラッサスの三人同盟提携して政權を握る之を第一三雄同盟と云ふ、シーザーは古今の英傑なり、クラッサスの死後ポンペーを滅し大に武威を耀して、大總督の號を得たり、大に國政を改め百般の事業を整理し、其在職二年に止まるも功績實に驚くべきものあり、紀元前四十四年元老院にて暗殺せられぬ。

第一三雄同盟、シーザーの養子オクタヴィアスなる人アントニー及レピダスと第二三雄同盟を作り暗殺者を亡ぼし尋て三人相争ひレピダス先倒れ、アントニー又亞非利加に敗死す、オクタヴィアス(オーガスタスと改

稱す)今や全羅馬大國の首領たり、國民尊て大統督の號を上る(紀元前二十七年)

### 第五 帝政時代

オーガスタスの帝政、オーガスタス即ち大統督の號實は皇帝に同ト、史家は此以後を羅馬帝國と稱す、其版圖の大なる歐洲西南全部と亞細亞亞非利加の一部に跨り人口一億を超はたり、羅馬は其首部にして殿堂浴場劇場皆壯大を極め帝又銳意して之を輔け市民を以て政治に喙を容るゝの暇なからしめたり、羅馬の文明、羅甸文學は共和政の時より起り帝政となりては一層の發達をなせり、其他種々の技術事業皆

大に進歩發達せざるはなきも其裏面には漸次道德の腐敗に傾き來るを認むるなり  
耶蘇教傳來、耶蘇教は西洋史に至大の關係を有す、開祖耶蘇基督は紀元三十一年磔刑に處せられしが、徒弟四方に散りて大に布教に力む、其羅馬に入るものは大に皇帝に苦められしが、後には漸次盛大となれり、  
オーガスタス帝後の諸帝治、紀元二世紀頃より軍人大に跋扈せしが、ユンスタナン(四世紀の始)の時大に帝威を恢復せり、此後頑強なる蠻人東方より續々帝國内に侵入し來り各地を占領せり、セナドシアス帝の時(三百九十五年)遂に帝國を二分して東西となせり、

此れより帝國の勢次第に衰へ西羅馬帝國最後の帝王四百七十六年に廢せられたれば、國は名義上東羅馬帝國に合せられ、實は蠻人の手に歸り了りぬ、上古史茲に終る(東羅馬帝國は一千四百五十三年に亡ぶ)

## 中世史

### 中世史の範圍及性質

中世史の範圍は四百七十六年より第十五世紀の中頃迄に至る、此間は古代の文明が侵來の蠻人に破毀せられ更ニ近世文明の勃興するまで十一世紀間を包圍せり、中世史中最も注意すべきは耶蘇教の旺盛と近代歐洲諸國の創始此れなり、

### 第一章 フランク王國の建設

西羅馬帝國滅亡前侵入し來れる蠻人の内にフランク人あり、其王クロヴィス初て都を巴里に定めゴール(今の佛國)を占領す時より五百七年なり、チャールス大王の世に

至り大に攻伐と布教とを力め頗る富強となり王は遂に西羅馬皇帝と稱せり(八百年)帝崩トて嗣子暗愚諸子相争ひ、父帝崩後其國を三分し(八百四十三年)後又更め分つ(八百七十年)東西フランク國及び以太利と云ふ、略ほ今の獨佛、以の地にして三國は此時より真正に建設せられたり、

### 第二章 サラセン帝國

中世にサラセン帝國と云へる大國を生ぜり、其始祖をマホメットと云ふ(五百七十年)一六百三十二年(亞刺比亞)のメッカに生れイスラム教(一名マホメット教)を創始し、教を奉せざれば武力を以て之を強ひ、遂に全く亞

刺比亞の領主兼教主となれり其繼嗣者は愈盛んに其遺略を繼ぎ八世紀の中頃には其版圖西部亞細亞北亞非利加及西葡の兩國に及び此をサラセン帝國(サラセンはマホメットの從者の義)の極盛時とす然れども其七百三十二年佛國に侵入するや却て大敗しぬ此後國東西に分れ東は十三世紀西は十五世紀に滅びたり

### 第三章 耶蘇教の盛大

耶蘇教は四五世紀頃より漸く歐洲一般に傳布し大僧正僧正などの僧官生じたり五百九十年羅馬府の大僧正遂に羅馬法王と稱す此れより相繼て法王たるも

の銳意其勢力を増し各國の僧官を其配下に歸し其本山を宗教界の中央政府となせり此時東羅馬帝國一名希臘帝國に於ける耶蘇教義は稍々之れと異なるありて類に反對せり故に之を區別して一を希臘教一を羅馬教と云へり法王の勢盛大となるや法王は帝王の上に位すと主張し爲に屢々帝王と衝突せり然れども其信仰は愈深厚となり遂には十字軍を出すに至れり

### 第四章 十字軍

原因 耶蘇教の開祖たる基督の墳墓はパレスチナのシユルサレム府にあり全世界の全教徒の最靈地と稱する處にして巡拜者極めて多し十世紀頃より此地の



土耳其領となるや、土耳其大に全教徒を虐待しければ之を見聞せる歐洲の全教徒は大に憤慨しシユルサレムを奪返へして耶蘇教徒の國となさずんば已まざると奮起して此遠征軍に加はれり之を十字軍と云ふ徽號皆十字を用ゐるを以て此名あり、  
 經過及結果、十字軍は千九十六年に始まり第一回は其目的を達したれども再び敵に奪はれたる爲め回復を謀り尙六回の十字軍を發したるも其功なかりき  
 千二百七十年に終る

十字軍は直接の目的は達せざるも間接の利益は極めて大なるものあり、各國間の交際親密となり見聞を廣くし航

海を獎勵し商業を發達せしめ市府の發達を促したり、

### 第五章 封建制度及騎士

此二は中世の特有物なり、封建の起因はもと蠻人が侵畧地を占領するや、其王先づ一部の土地を取り其余を臣下に與ふの風あり、此れ未だ封建にあらず、王更に其私地を臣下に與へ此れに其報酬として戰時兵を率て出陣するの義務を負はしむ、此臣下は更に其臣下に此の如き關係を生じ遂には幾重にも此關係を有するに至るべし、此れ封建の初めなり、後には小領主より其地を大領主に獻し其保護を乞ひ好んで封建の義務を負ひ八九世紀頃には西歐諸國は大抵皆封建國となれり、

此制度十字軍の頃より大に衰へ帝王と市府の權盛なるに從ひ漸次廢絶せり、騎士は封建の粹と云ふべく、もと皆臣屬の子弟にして幼時より諸侯の城内に育はれ、二十一歳にして騎士となる、其義務は強を挫き弱を援け君に忠に宗教保護に紛身するにあり、十字軍の時騎士の價值大に上りしが中世の終頃頃衰滅に歸せり、

### 第六章 獨佛其他各國の有様

獨逸 は尙チャールス大帝より西羅馬帝國の號を繼承せり帝王は遂に撰舉侯之を撰舉するに定まりたり、一方には羅馬法王と相善からず屢々爭論を開けり、

佛蘭西 は其後一二回王統を更へしが千三百三十九年英國王と王位繼承のとより戰端を開き英兵大舉入寇せり、千四百五十三年に至り英人佛蘭西を去り事平ぐ、之を百年戰爭と云ふ

以太利 は許多の小邦に分れ十二三世紀頃にはヴェニス、ゼノア、フロレンス等の諸市大に勢を得て皆獨立せり、

英吉利 は今の獨逸の北岸より移住せるアングロサクソン人之を占領し九世紀より一統の王あり、十一世紀の頃歐洲の北部を荒らせる北人の佛國に於て征服せるノルマンダーの公たるウィリアム一世侵入して

其國を領し王權極めて盛んなりしが、ジョン王の時政を失せしかば貴族等迫て大憲章を承認せしめたり(千二百十五年)已にして國會も其成立を完ふし(一千二百九十五年)更に威を佛國に輝せり、  
露西亞は九世紀頃其國を建てしが幾もなくして大に衰へたり瑞典波蘭等亦此頃より創建せられたり、  
西班牙はサラセン帝國の一部たりしがアラゴンカスチールの二州合併してサラセン人を逐ひチャールス一世に至り全西班牙を領し西班牙國成れり(千五百十二年)葡萄牙は十二世紀より獨立せり、

### 第七章 中世末期の有様

市府の發達、市府はもと其領主たる諸侯又は騎士の爲に暴行強迫に遭ひ大に苦しめられしより帝王の直轄となり其保護を受けたり、十三四世紀頃より各地の市府大に隆盛となり、往々數十市の同盟を作り商業政治の上に勢力を得るものあり、ハンサ同盟の如き其尤なり、以太利の諸市又富強を致せり、其結果中世の末期には各國を通トて中等社會の人民政治上に多少の權利を得るに至れり

東羅馬帝國の滅亡、東帝國は上古より引續き存在すれども次第に勢を失ひ六世紀の頃ジャスナニアン大帝出でしと雖も其後の帝王概ね暗弱、軍隊は專横し流れ

れ風俗敗壞し版圖は目に蹙れり、中世の末、土耳其人小亞細亞に起り漸次帝國を蠶食し千四百五十三年首都を陥れて帝國は茲に亡びたり、コンスタンチノープルは此れより土耳其帝國の首都と變つたり

### 第八章 中世の文明

中世の初期は上古の文明を破毀したる當時とて殆んど蒙昧の状態たり故に十世紀頃迄を暗黒時代と異稱せり、然れども十一世紀頃より文明の光微かゝ顯はれ來り其末期に至りては所謂文物復興の期よして諸種の科學は古代文學の研究と相俟て大に面目を一新せり、

## 近世史

### 近世史の發端

歴史の年代區分は元と世運の變遷、社會の進化等により段落を生じたる時に於て初て起るべし、此段落は明白に其年月を指定するは頗る難く、殊に中世と近世とは明に一線を以て區劃する能はされども十五世紀の頃に於ては歐洲一般の氣運已に中世的にあらざり、故に此時代を以て近世史の發端とす

### 第一章 航海術の發達及其結果

歐洲近世の氣運を喚起したるものは實に航海術の發達にあり、十五世紀頃までは歐洲人の足、大陸を離る、

極て稀に、適々以太利商人の銳氣を以てして尙地中海内の航海に止り、其東海岸に出でたる東洋物産と貿易して之を各地に輸送するのみなりし。

葡萄牙國の航海獎勵、中古末期土耳其入地中海の東海岸を占領し東洋貿易の利益を壟斷し爲に斯業の商人は大に苦み以國の諸富市皆一時凋衰したり、東洋貿易とは主に印度より送り來れる物貨を得るにあり、是に於て人々皆新に商路を開て印度に至らんとを思へり、葡國先づ海路亞非利加を廻航して直接其地に達せんと企を起しぬ、當時亞非利加は其地形さへも知られざるに葡國は不屈不撓冒險又冒險遂に千四百

八十六年其南端に達し喜望岬と命名したり、

亞米利加發見　讀者は皆我地球の圓くして地球の名ある所以を知らん、然れども十五世紀頃までは歐洲の學者さへも此を信ざるもの極めて少なかりき、以太利にコロンバスと云へる人あり、深く地球説を信ト歐洲を發して眞直に西航せば直に印度に赴くべきを思ひ熱心に諸國の帝王に説き最後は西班牙の女王之を補助し給ひ千四百九十二年太西洋に向て航行し遂に亞米利加大陸に達す、此れ氏の圖らざる所なりし、此を聞きたる歐洲諸國續て船艦を派し新大陸未知の地を占領せしが南北大陸の過半は皆西領となれり、

印度航路の發見、葡人之を聞て一層奮起せしが  
 アスコダガマ遂に印度に達するを得たり(千四百九十八年)

海外に於ける歐洲人、葡國は亞非利加の東西海岸及印度洋海岸を占領し支那日本へも交易を營み統督はゴアに駐劄す、西國は新大陸及フロリッピン群島に據りマニラを東洋の根據地とす、此れより大凡一百年を隔て、蘭英佛其他の諸國續々東洋に向て船艦を送り互に商權及領土を爭奪せり、

### 第二章 羅馬教改革騷動—耶蘇教三派

耶蘇教は中世に於て王權をも壓するの極盛に達せし

が近古に於て大改革騷動ありてより次第に衰運に傾き今や全く政治上の權力を失へり而して今茲に述ぶる所は正に此の極盛より衰運に向ふの時期なり、羅馬教は中世の隆盛に忸れて腐敗の極に達し近世の始め文物復興の時世と相背馳せるに留意せざりき故に改革は到底免れざる所より果然第十六世紀の始めに於て大破裂を生じたり、

獨逸にマルタン・ルーサーと云へる名僧あり常に羅馬教の腐敗を嘆せしが時の法王レオ十世赦罪狀を賣却し以て金錢を集むるを見るや大に憤り千五百十七年堂々論文を告示して其不當を鳴らせり諸侯人民の之

を賛するもの多し、獨逸皇帝チャールス五世、法王と結んで之を鎮壓せんとすれども能はず、ルーサーは聖書の本旨に基き更ニ儀式教義を定め一宗派を拓きぬ、此を新教と云ふ、此に對して舊來の羅馬教を舊教又は羅馬教と云ふ、是に於て耶蘇教は分れて三大派となれり、

(一) 希臘教(東羅馬帝國より東歐諸國に傳ふ)

耶蘇教

(二) 羅馬教(西歐諸國)

(二) 舊教

(三) 新教

此れより新教は歐洲の各地に起り佛國のカルヴィン、瑞西のツウイ、ングリ又一層急激の説を唱へ盛んに舊教を攻撃すれば舊教中よゼシユイット派なる頑固の舊教徒

を生せり、此時に當り全歐諸國何れも其影響を受け其結果として(一)和蘭國獨立す、(二)西班牙國舊來の霸權を失ふて衰運に向へり、(三)英國隆盛の端緒を開く、(四)獨逸に三十年戦争起りて國全く疲弊す、(五)佛國極盛の時代に達せり

### 第一 和蘭國獨立

和蘭國は元と西班牙の属領たり、夙とに商工の業盛んにして人民皆新教を奉せり、獨逸皇帝チャールス五世の位を去るや(一千五百五十六年)皇子フリッポ二世に西班牙及其属領を與へ獨逸帝位を皇弟フリーゲナンドに譲れり、フリッポは熱心なる舊教徒なり、全歐を舊教化して自

ら首領たりんとするの大志あり先づ本國の新教徒を全滅し尋て属領に及び宗教裁判所を設けて新教徒を虐待す和蘭遂に堪ゆる能はず兵を擧て反しウリアムを戴て首領とす西兵來り攻めて克つ能はず英國又和蘭を助けしかば西班牙遂に意を挫けて休戰條約を結ぶ時に千六百九年なり和蘭茲に獨立し盛んに航海貿易を力め海外の西班牙領地を奪ひて國勢益々振へり、

### 第二 西班牙國ノ盛衰

西班牙國王ナールスが獨逸皇帝となるや實に西班牙國極盛の時代なりと云ふべし、フリップ二世嗣て立ち葡萄牙と其領地とを合し愈隆盛となり歐洲の霸權を握

るの勢力ありしが舊教擴張の事より和蘭の獨立となり之を助けたる英國を撃ち大敗して國力俄かに衰耗し海外領地は英蘭二國に荒らされ嗣王の暴政は一層國威を損し此れより漸次衰運に向へり

### 第三 英國の隆盛

英國にも新教輸入せられて信徒漸く加はり諸王中或は之を保護し或は虐待せしがエリサベス女王の即位するや(一千五百五十八年)新教を以て國教となし遂に歐洲新教國の首領を以て目せらるゝに至れり和蘭の獨立を企つるや其新教徒たる所以を以て之を助けしかば西王大に怒り不滅艦隊を派し(一千五百八十八年)



一舉して英國を滅さんとす、然れども此戰西國の大敗に歸してより英國の國威俄に張り他日世界の大海軍國たるの素因をなせり、女王の時代は又シークスビヤの如き文傑出で、商工の業亦頗る進歩せり、

#### 第四 三十年戦争

獨逸は新教の卒先者なり諸侯の之に歸依するもの多しと雖も皇帝以下舊教を奉ぜるもの猶頗る多く兩派の軋轢は年を追ふて甚しく各々黨類を樹て首領を推して相下らず遂に千六百十八年些細の事件より破裂して兩派の大戦争となりぬ、舊教軍の勢強く一旦新教軍に勝ちしが丁抹王來て新教軍を助けたり、帝軍即

ち舊教軍にはナリー、及ワルレンスタインの二將ありて連戰連捷新教軍殆ど支るを瑞典王グスタフス精兵を率て來り助く、英國は軍資を送り佛又援助せしがグスタフスの死後は佛國主に新教軍を援け舊教軍は其名將を失て一層振はき遂に千六百四十八年ウエストフリアに平和條約を結びぬ、此戦争正に三十年間故に三十年戦争の名あり、此條約により佛、英、瑞、丁、の諸國は各地を得利する所ありしも獨逸は此の長き争亂に苦められて商工は疲弊し田圃は荒涼となり容易に復舊せざりき

#### 第五 佛國の霸權時代

佛國も宗教争亂已まざりしがヘンリー四世英邁にして一時之を鎮めしがルイ十三世嗣立千六百十年一千六百四十三年(するに及び大宰相リシュリュー(在職千六百二十四年一千六百四十二年)立國の大本を定め内貴族と新教派とを壓し外、奧太利家(則ち獨逸皇帝)を抑へて歐洲に覇たらんとす、先づ國內を鎮定し次に三十年戦争に新教軍を助けて帝軍に當りぬ、策中りて獨逸大に疲弊したれば佛は是より隆盛となりぬ、ルイ十四世(一千六百四十三年一千七百十五年)の時代は佛國全盛の極にして歐洲の覇たり、王戰を好み屢干戈を動かして全歐の怨を買ひぬ、晩年西王繼續戦争に失敗してよ

り稍々衰退の徴を表しぬ

### 第三章 英國大革命及王政復古

英國は近世の始めより平民漸次勢力を得たりしがエリサベスに次で蘇格蘭王ジェームス一世及其子チャールス一世(一千六百二十四年一千六百四十九年)の立つや、王權擴張を力めて人民の不人望を來たしぬ、英國の國會は千二百九十五年以來完備して人民の代議院たり、チャールスの暴政に對し國會は之に服従せず遂に干戈を以て王と雌雄を決し王を捕へて之を弑しぬ、因て共和政体を立て、クロムウェルを首領とす、尋て薨す子襲くも直に罷め、一千六百六十年又王を立て、王政復古と

なりぬ、此れより今に至るまで國王を戴くと雖も政權は漸次人民の握る所となれり、

#### 第四章／露西亞の勃興

露西亞は中世以來頗る衰へしがピーター大帝千六百八十二年一十七百二十五年即位するや、慨然蹶起率先自ら西歐に遊學し盛に貿易造船の業を獎勵し瑞典及土耳其と戦て地を南北に拓きユサツク人を西比利亞に移して大に東方を経綸したりしが嗣て帝たる人皆英傑なりしかば露國は此時より漸次歐洲最強國の一に列せられぬ、

#### 第五章 普魯西の勃興

獨逸は古來聯邦の有様に於て皇帝は諸侯之を撰舉せしが、壞太利王十五世紀頃より世々皇帝たり、三十年戦争以來國疲弊して頗る衰頹の狀あり、聯邦内の普魯西國千七百年頃より隆盛となり一千七百四十年、フレデリック二世即位するや一層富強となり諸強國の同盟軍と戦て少しも屈せざ大に雷名を轟しぬ、此れより普魯西は獨逸聯邦の一に列すれども實は歐洲の強國となりたり、今日獨逸聯邦の覇たる素地は全く此時に作られたり、

#### 第六章 北米合衆國の獨立

北米は十五世紀以來歐洲諸國の殖民地たり、英國は今

の新英蘭、西班牙は墨西哥、テキサス、カリフォルニア及中米を領し、佛は其以外を所有せしが、英佛相争ひ其結果佛は加拿太を失ひ、英の殖民地大に擴張せり、然れども英の本國政府が其殖民地を遇する極めて苛酷なりしかば、加拿太以外の十三州の殖民地相同盟し、干戈を執て本國に反抗し、ワシントンを推して總督とし、一千七百七十五年より苦戦七年に及び、一千七百七十六年獨立の宣言をなす、遂に佛蘭等の助力によりて頻りに英軍を破りたれば、英力屈し、一千八百八十二年其獨立を承認せり、之を今日の北米合衆國の建國とす、其政体は各州自治の制にして、事全國に關するものは大統領

(任期四年)と立法院とにより之を處斷するの新法なり

### 第七章 露西亞の膨大、波蘭の滅亡

北米紛擾事件に際し、西歐諸國は一時此方面に熱注し、他を顧るの違なり、此機に乗じて露國の英主、女帝カザリン二世は、大に國勢を擴張し、頻りに四隣を蠶食し、遂に、墺太利、普魯西の二國と謀り、三國間に介立せる波蘭王國を分割せんとを約し、突然武力を以て之に臨み、遂に一千七百七十二年、一千七百九十三年、一千七百九十五年の三回にて、全く之を分領し了りたり、而して露國の得る所最も多く、膨大なる一帝國は直に中歐諸國と境を接するに至れり、

## 現代史

六十

### 現代史發論

第十八世紀末に起れる佛國大革命は政治上社會上に於ける氣運の轉期にして史家は通常茲に現代史を起す

### 第一章 佛蘭西革命

#### 第一 革命の原因

其根原は中世に於ける宗教權の旺勢、近世に至りて漸次衰退し、繁文獨斷の教義を攻撃して其氣焰は延て政治上に及し來り、近世に於ける君主專權の極盛に反動を生じ自由の説を出すに至り、英國先第十七世紀に其

君を弑し、共和制を立てり、王政復古するも、人民は人民を支配するてふ概念は深く英國民の腦裏に浸潤せり、佛國の學者、ヴォルテアール、ルーソー、モンテスキュー、此思想を輸入して盛に唱導し、宗教社交の腐敗を絶叫し進て全般の舊慣を打破し、根本的社會改良を大呼しければ人民頗る此説を傾聽せり、彼、北米合衆國の獨立はルーソーの説を實地に顯出したるものなれば、人民は一層平等自由を望めるに當りて、會之を助成するに足るべき失政多かりしかば、遂に未曾有の慘劇を生じて此説を實行するに至れり、

助成原因は(一)土地は全國三分一のみ平民の有にして

餘は皆貴族と僧侶之を領し、課税は獨り平民之を負擔す。(二)佛國の製造貿易は、皆一個人の專有に歸し、爲に其發達を妨げ細民苦めり。(三)此危急に際し國王優柔不斷なり。(四)最も直接なる原因は財政の紊亂にしてルイ十四世以來の巨億の負債は益嵩めて償却の道なく、課税は益平民を苦めて遂に大破裂を來たせり、

## 第二 王政顛覆

一千七百七十四年ルイ十六世即位す、年二十、王先づ財政を處理せざるべからず、ツルゴ、ネツケル等の名相出でしが、其唯一の策として、貴族僧侶より徵税するを主張せしが大に反對せられて、王は之を留任せしむ

るの力なかりき、之に次ぐの凡相は策の施すべきなく、遂に縉紳會を開き、貴族僧侶高官と議せしも効なし、一千七百八十七年ネツケル再ひ相となり、一千八百八十九年國民總會を開く、貴族僧侶各三百人、平民六百人の議員を出し、ツエルサイユに會す、平民は兩院を合して一院とすべきを主張し、貴族僧侶之に抗し、王決する能はず、巴里市民激しく聲援を與へ、平民全く勝ちぬ、平民は勢に乗じ、狂奔してバスナールの獄を破壊せり、貴族等争て國外に走る、八月四日の議會にて貴族僧侶は全く其特權を捨て、大に民心を和平せんと計りしも、時既に遅れたり、王暗愚、朝臣の言を入れ、兵を王宮に招き、盛に

將士を饗し以て暴民に備ふ、飢餓せる數萬の細民、怒て王宮に迫り、王を巴里に奉り、平民の勢當るべからず、當時漸政黨を生じ來りしが、畧左に示すが如し

立憲王政黨 勢力薄弱なり、ラフ、エト、ネッケル等首領

王黨 勢力なし

温和派 議會にありては平原派と稱す、其

共和黨 中シロンド黨最も顯はる、

過激派、 議會にて山岳派、其中シヤユビン黨

民友黨等あり、マラー、ダントン、ロベスピエール等首領

王は遂に恐怖の余り一千七百九十一年七月一度脱走

せしが囚へられて巴里に歸りしが、在外の貴族等、頻に外國を説て其援助をかり共和派を壓せんとし、普墺の兵、國境に迫り來り、王之と氣脈を通ずるの形跡ありたれば八月十日、暴民遂に王及皇族を幽囚し、王黨員を殺すと三千人、王政茲に了る

### 第三 共和時代の佛國、及列國の情体

一千七百九十二年國民議院成り、國政を掌る、シヤユビン黨勢力を得、共和に反對せるものは皆之を殺す、王及皇后弑せられ、温和派員屠られ、斷頭臺に上るもの日に數十人、人心恟々、堵に安んせき、之を恐怖時代(一千七百九十九年)と云ふ、然れどもマラー、ダントン死じ、ロベスピエ

ル威權烈日の如くなりしが、一千七百九十四年亦殺され、其黨員大半屠らる、巴里の人心共和を飽き且懲り漸く平和を望むの徴あり

先是列國は佛國大變動を見て自國の民の之に倣んとを恐れ、奧普先づ一千七百九十二年同盟し、佛は之と戦て利あらき、然れども王の弑逆後佛軍勢遽に加はり、更に西葡、蘭英とも戦ひ、却て勝を得、蘭を占領し、バタヴィヤ共和国を建てたり(一千七百九十五年乃至一千八百六年)

一千七百九十五年以後、佛國は五人の執政、國政を執る之を執政時代と云ふ(一千七百九十九年マデ)、奧を破り、白耳義及南地を得、更にシスアルピナ共和国、リグリ共和国を伊太利

に建て其保護となし(數年ニシテ)、ヒブ一千七百九十七年亦瑞西

を占領し、ヘルツエナ共和国(後古名に復す)を取れり、更に埃及を討ちしが、海軍を英將ネルソンに破られて苦めり(後和成リ)

一千七百九十九年露英、奧第二同盟を作り、類に佛國を破る、ナポレオン 埃及より歸り、先づ内政を革め、參政政治(一千七百九十九年乃至一千八百〇四年)を作り、自ら其首班となり、更に伊太利に侵入して、奧兵をマレンゴに破り、別將又ホーレンリンデンに大捷を得、奧をしてリュネヴィユの和を乞はしめ地を得たり

第二章 ナポレオン一世時代(一千八百〇四年乃至一千八百十五年)



一千八百〇四年ナポレオン遂に皇帝の位に即く、列國之を承認せず、一千八百〇五年第三同盟を作りて佛帝と戦ふ、元來佛國は陸軍強盛なるにナポレオンの武畧を以てし、當時天下に敵なしと雖、海軍は微力にして、西國の艦隊を合せしも尙英に及ばざりき、殊に一千八百〇五年英將ネルソンの爲にトラファルガー岬に佛、西連合艦隊を全滅せられてより、全く海上に出る能はざるに至れり、帝の失敗は實に佛海軍の薄弱に基けるなり、然れども陸戰にてはアウステルリッツに露、墺同盟軍を破り、墺に和を乞はしめたり、墺帝は此時迄所有したる神聖羅馬と稱せし獨逸帝國の帝冠を撤し、單

に墺帝と稱するに至れり、(一千八百〇四年)佛帝は和蘭及ポーランドに其兄を封じ、萊茵同盟を作りて保護者となり、遂に普軍をエナ、アウエルスタートに破り、(一千八百〇六年)て伯林を占領し、有名なる大陸條例を發布し、歐洲列國をして英と交通するを禁じたり、又進んで露を破り、普露兩帝とチルシットに和を結び、大陸條例を遵守せしめたり、(一千八百〇七年)帝又謀を以て西、葡二國を占領し、其兄を封じ、墺國が其虚に起りしをさし、直に墺國に入り、ワグラムに大捷を得、維納條約を以て之を抑制したり、一千八百十年は帝の極盛時代なりしが、一千八百十二

年露國大陸條例を破りて英と交通するや、大兵を擧て露を攻めて大敗し僅に身を以て免れ歸る、列國大に喜び相合從して四面より攻撃す之を自由の同盟と云ふ(一千八百十三年乃)敗餘のナポレオン列國の大敵を受け(至一千八百十四年)て屈せず、屢之を破りしも遂に支へず、一千八百十四年同盟軍巴里を占領し、帝をエルバ島に流しルイ十八世を立てぬ、佛は再び王國となり、列國は自由獨立を回復し、更に善後の處分を議せん爲、塹都に會す、維納會議此かり(至一千八百十五年乃)此時チザラント王國(今の荷蘭白耳義)成り、獨逸聯邦(今の墺匈及獨逸)を作りて、墺國を盟主となし、他は皆舊の如し。

ナポレオンは一千八百十五年再び佛に返り、全國を回復せしが、聯合軍とウオーターローに戦て大敗し、セントヘレナ島に流され、佛は王政に復せり、帝は一千八百二十一年崩せり。

### 第三章 大革命ノ影響及反動

#### 第一 大革命の結果

歐洲全土は其風潮を受けて、民主自由の呼聲頗る高く、佛帝の敗後益勢を加ふる君主は却て之を抑へんとして、茲に人民との衝突起る、然れども世の開進と共に人民次第に勝を制せり、

#### 第二 神聖同盟

一千八百十五年九月二日露帝は普墺二國の帝王と神聖同盟を起す、聖書の本旨に基きて人民を愛撫保護せんとを約せるものにて、英、土、兩國及法王の外、全歐洲の君主皆之に加盟したり、而して墺國、メツテルニツヒは最巧に之を利用し、他の專制國と連合し、民權の伸長を抑ゆるの具となせり

### 第三 墺國の隆盛

此頃墺國の實力は頗る衰微せりと雖も、メツテルニツヒ能く其弱點を掩ひ、墺國の位地を上げて一時歐洲の運命を左右するに至らざりたり

獨逸聯邦内にては先づ嚴に自國を壓し、他の自由主義

の國にありて青年學生が民權の擴張に付て頗る不穩の形勢あるを口實とし、巧に其君主宰相を籠絡し、聯邦會議を以て嚴に之を抑制したりき、普魯士の如きは唯唯として其命を聞くのみ、以太利に於て革命思想頗る盛となり、秘密結社など起りければ、其風潮の墺領に及ぶを恐れ、外交と兵力とにより全く之を鎮壓して、其手中に歸せしめ、サーヂニヤ王の以太利王國建設の計畫を破りたり、西國又革命黨を壓し、メツテルニツヒは常に神聖同盟國を誘て凡ての民權伸張を壓抑するに勉めぬ、

### 第四 南米の獨立

革命の風潮は南米及びメキシコに入り、此等諸地方は西國の手より離れて獨立せんとし、叛旗を挙げしが遂に成功したりき、其順序を云へば

千八百十八年、ナリ國  
千八百十八年、アルゼンチン國  
千八百十九年、コロンビア國(ニユグヲナダ、プエチゼラノ二國ヨリ成立ス)千八百二十三年、エクアドル國  
レニ加ハリシガ千八百三  
十年分裂シテ三國トナレリ千八百二十一年、メキシコ國  
百二十一年、ペリユリ國

孰れも共和制をとり、北米合衆國に倣へり、メツテルニツロ即ち神聖同盟國を動かし、之を制せんとすれども、海上王たる英國之に反對し、北米合衆國大統領モンローが歐洲列國が亞米利加に干渉するを拒むを公言した

る爲之をモンロー主義と云ふ北米の國是たりき(果さず、

第五 英國の情体

英國は其位置海島たるの故を以て、革命の風潮に犯さるゝと少く、神聖同盟の大陸に跋扈するに關せざ、獨有の海軍力を利用して、意を殖民地の増殖に專にし、地を西印度諸島、西南亞非利加、アウストラリア、ジブラルタ、マルタに拓き、愈々海上を横行し、全く世界の海上權を握るに至れり、

第六 希臘の獨立

紀元前百四十六年羅馬に全滅されし希臘は第十五世

紀より土耳其の屬國となり殆ど二千年來附庸の地位にありしが、大革命の風潮は其人民に獨立の氣象を鼓吹し、人民は古代の隆盛を回顧して慨然叛旗を上げんとする秘密結社を起さしむ土國の勢衰頽せるに乗じ遂に一千八百二十一年を以て兵をあぐ、壞相は例の手段により神聖同盟國を説き希臘を救はしめき、希臘尙屈せき全國死力を出して土軍に當りしが埃及(土國の藩鎮)の精兵來るに及びて頻に敗れたれば、英相は忽ち露佛を説て同盟を作り、三國連合艦隊は土埃の艦隊をナポリに破り(一千八百二十七年)露の陸軍又勝ち、一千八百二十九年遂にアドリアノーブルの和議となり

翌年希臘は全く獨立を承認せられて王國となり、以て今日に及べり、神聖同盟漸く衰ふ、

### 第七 佛國の情体及七月革命

ルイ十八世再ひ佛國王位につくや、勉めて民望を收攬せければ、一時は少康を得たりしが元來極端に走り易き佛國民は、革命時代の反動として急激なる勤王黨を起し、共和派を虐殺せり、一千八百二十四年ナヤールス十世即位す。昔時の王朝隆盛時代を追慕し頗る壓制を行ひしかば、人民再ひ反動を起して不穩の狀あり。一千八百二十九年、ポリーナツクの相となるや、愈民權を壓するを勉め、加之アルゼリヤを征して失敗し、議會に反

對黨多きを見て直に解散を命じたれば人民遂に堪ゆる能はき、一千八百三十年七月巴里市民起て王を追ひルイフィリップを迎へ立つ、之を七月革命と云ふ

#### 第四章 七月革命の影響

##### 第一 白耳義國の獨立

白國はもと西領たり後墺領となり維納會議により和蘭と合しチザラント王國と稱し和蘭王君臨せり、此地かく和蘭と歴史を異にし言語宗教生業利害全く相異れり、然るに和蘭王失政多く白耳義頗る不平なり、會七月革命巴里に起るや、白耳義人之に激せられて叛旗をあぐ、一千八百三十年八月和蘭克つ能はず、諸強國二

國を調和し倫敦條約にて翌年一月白耳義王國茲に起れり、今の白耳義の建國とす、

##### 第二 墺普兩國の消長

獨逸聯邦中南部諸州は、初めより憲法政治を布きけるが、茲に至り北部の諸州續々憲法を布き頗る民意を容れたり、墺國の威權大に損し余喘奄々たりし神聖同盟は全く消滅し了れるに、普國は漸く勢を得、一千八百十九年以來漸次關稅同盟を結て自ら盟主となり、窺かに墺を壓して之に代らんとするの狀あり、

其他に於る影響　波蘭に反亂起りしも露國に壓服せられしが、伊太利、瑞西、西班牙には民黨頗る勢を得た

り英は是より先き一千八百二十四年國教宣誓を止め、愛蘭細民の不平はサーコンチルの盡力によりて稍回復するを得たり、

### 第三 土埃事件

東方にありて埃及王土耳古の藩鎮土耳其の衰弱を機とし、大兵を以て之を攻取んとす(一千八百三十二年五月)土耳其拒ぐ能はず、露之を救ふて大に利する所あらんとす、英即ち佛、奥、普と露に交渉し、共々土埃の調和を計り事落着せしが佛國獨り頗る屈辱を蒙れり、

### 第五章 佛國二月革命

佛王ルイ、フィリップは頗る平和主義を採り、波蘭以太利の獨立戦争にも之を救助せず、共和黨ブルボン黨ナポレオン黨等皆喜はずして反亂を起せしとあり、然るに當時佛國に社會主義として凡ての階級を打破し、貧富貴賤なからしめんことを主張するもの流行し、其精神を歐洲全土に傳播せしが、佛國其巢窟となり、王の反對黨と結托して政府に反抗の色あり、一千八百四十年ナポールの宰相たる、王の政府は稍活氣を帶び、土埃事件の頃、埃及を助て大に爲す所あらんとしたるも、王聽かき乃退職す之に代れるギゾーの内閣は、平和主義にして人望を失し、政府は却て人民の政治集會を禁ざるに至りて、巴里全市憤慨起て王を追ひ、共和制を立てたり(一千

八百四十八年二月之を二月革命と云ふ、其十一月、ルイ・ナポレオン(大帝の弟の子)撰れて大統領となる。

### 第六章 二月革命の影響

此前年、瑞西は舊教新教の争ひより、國二分せんとせしが、此年兵力を以て新に聯邦を組織せり、此時内部の不統一を極めたる獨逸聯邦は頗る之を羨みけるに、會二月革命佛國に起るや、競て民權伸張を其君主に迫れり、奧國にては、首都に暴動を起し、メッテルニッヒを逐ひて國會を開き、普國は民選の議會を許可し、聯邦は議員をフランクフルトに會し、憲法改正を計らんとす、匈牙利のユッシュュートは、自國を奧國より離れて獨立せ

むめんとし、兵を上げ、奧國は露國の援助を得て、僅に之を壓したれども、革命の氣は全獨逸に洩り、皆奧國の無力なるを知り、普國を戴て、鞏固なる聯邦を造らんとす、奧國は恐れ且妬み、普國は勢に乗じて一新帝國を立て已れ霸たらんとし、兩國の形勢頗る急なりしが、露國奧國を助け、一時普魯西をして其驥足を伸ばさしめざりき(一千八百五十一年)

以太利又奧國の干涉を怨みしが、人心の動搖を機とし、サーゲニア王アルバート兵を起して奧を伐ち、全半島を統一せんとせしむ、奧將ラデツキに破られ、王位を皇子ヴィクトル・エマニユエルに譲りて退隱す、羅馬も一



時法王を追ひ共和制を立てしが佛のナポレオン干涉して法王を復したり(一千八百四十九年)

されは此革命の影響は直接民権の勝利なかりき只た根底深く其基礎を定め他日大破裂をなすの素因たり、

### 第七章 佛國の第二帝政及クリミヤ戦争

ルイ、ナポレオン大統領となるや其大野心を遂げん爲に勉めて兵士の歡心を買ひ僧侶と結托し民心を收攬し機至るを見て、一千八百五十一年十二月急に反對黨を捕へて禁錮し翌年十二月遂に皇帝に撰舉せらる、此頃露國は益々南進の歩を進めニコラス帝は遂に土國内の希臘教徒を保護するを名とし其内政に干涉せん

とし、兩國の平和破れたり(一千八百五十三年)佛帝は英國と土國を助けて兵をクリミヤ半島に出しセバストポールの堅砦を攻め之を陥る(一千八百五十四年乃至一千八百五十五年)遂に露國と和し之をして一時南進せしめざりし功績は佛帝の勢力を最隆盛の地位に上げ爾後歐洲の覇權を握るに至れり、

### 第八章 以太利統一

獨逸聯邦の盟主たる奧國は愈衰へ普國は益々強しサリヂニア王は之を機とし宰相カヴールを任用し兵をクリミヤに出して英佛を助けて國威を揚げ遂に佛帝の援を得て奥と戦ひ之を破りしも佛帝蒼皇奧國と和し

たる爲に充分の成功あらざりしが(一千八百五十九年)此後獨立の小國漸次加入合併し其結果ヴェニス領<sup>境</sup>及羅馬法王領を除て全半島を統一し(マツジニー、ガリバルデー興て大効あり)ヴィクトル、エマニユエルハ一千八百六十一年を以て伊太利王と稱し都をフロレンスに定めたり、

### 第九章 北米合衆國の南北戦争

奴隸賣買は道義上勿論不可なり、合衆國の南部諸州は専ら耕作を業とすれば、奴隸使用の經濟なるを以て盛し使用すれども、北部は商業地なるを以て奴隸を要せざり、一千八百二十九年頃より、奴隸廢止の論大に北部諸

州の唱導する所となりしも、南部は極力之に反對し其爭論漸く激烈となり、一千八百六十一年リンコルン大統領となるや、其奴隸反對論者なるを以て、南部諸州は北米合衆國を脱し、別に政府を立つ、大統領乃ち兵を派し南北戦争茲に始る、

首 府 大統領 大將軍

北部 ワシントン リンコルン マグレロン後グラント

南部 リッチモンド デヴィス リー

一千八百六十一年に初り、一千八百六十五年南軍の降伏に了る、然れども此より全く平和主義をとり以て昨年に至れり、

## 第十章 普國の勃興——獨逸帝國再興

## 第一 普王ウイリアム一世、ビスマルク、モルトケ

一千八百六十一年普王ウイリアム一世即位す翌年、ビスマルクヲ舉げ首相とす、希世の君臣相遇して遂ニ普國の隆盛を致せり、ビスマルクは先づ衰弱の奧國を獨逸以外に排徐せんが爲に鐵と血とを以て強行すべしと定め、謀略神の如きモルトケ將軍の作戰計畫全く成り其機に至るを俟てり

## 第二 奧普戰爭

獨逸聯邦中のシユレンスウツク、ホルスタイン兩州は、丁抹王兼て之ヲ君たり、兩州民屢分離を謀て成らざり、一千八

百六十三年又兵力により分離せんとするや、普は奧を勸て、之を助け、丁抹を破り遂に兩州を分離し更に之を分領す、ビスマルクは密に以太利と攻守同盟を結び、露と佛とを説て中立を約さしめ、故らに奧國と施政上の意見を衝突せしめ、直に戰書を贈る(一千八百六十六年)奧國之に應せしか以國も亦直に奧國に向て宣戰せり、奧の南軍以兵と戰ふ間に、普軍は突進、奧の精兵をサドワに破り、奧遂に和を乞ふ、以太利は之に因てヴェニスを得、奧は獨逸聯邦より除かれたり、今の奧國帝國是れなり、殘りの聯邦は南北獨逸同盟に分れ、普國は北獨逸同盟の覇となり、勢朝敵の如し

## 第三 普佛戦争

佛帝は頃日頻に外交に失敗し、大に民望を失ひ、革命の兆候ありければ、今は非常の危難を冒して、普國を破り、以て民望を回復し、其地位を安固ならしむるの必要に迫れり、一千八百七十年西班牙王崩し、普王の近族其後嗣たらんとするを聞き、直に反對せしが、其事寢みて尙普王に迫り、陳情書を請求せり、普王怒て之を拒む、佛帝即ち戦書を贈り、八月普王亦尋て宣戦す

ビスマークは此事あるを豫知し、露に結托して奥に備へしめ、以國の中立して普佛は單獨に相戦ふとを熟知し、モルトケは數年前に戰略を豫定せり、開戦し當り普

軍の成算遺漏なく、次第に佛軍を破り、殊に南獨逸同盟之を機として北同盟に加はり、普の精兵百萬人境を壓して進み、九月二日セダン城陥り、佛帝降を乞ふ、佛國は直に共和制を建て(爾後今日迄共和政ナリ)尙ほ普軍に抗せしも、久く支ふる能はき、九月十九日より巴里合圍せられ、十月廿七日メッツ陥り、翌年一月廿八日巴里遂に降伏し、地を割き償金を出して和を結べり、佛人は今尙此怨を忘れず、嘗膽獨國に報するの念勃々たり

## 第四 獨逸帝國復興

巴里陥落の十日前、普王ウリアム一世南北同盟を合し、新興せる獨逸帝國の皇帝に撰ばれ、普王は兼て世襲

の獨逸皇帝たるを公布す、今の獨逸帝國此れなり、

### 第十一章 露土戦争

露國は再び南進の歩調を早め、土耳其の藩鎮王を獨立せしめ、土國を弱めて乗ずる所あらんとす、故に一千八百六十六年以來屢々藩鎮王を教唆して反かしめ、之が後援をなし、獨立を助けたり、一千八百七十七年露土兩國遂にセルヴィア事件に衝突して交戦す、土將サスマンバシヤ、プレハナ城を堅守し、露兵死傷數萬に上りしも、遂に之を陥れ、益々土軍を破りて將に其國都に迫らんとす、土國遂に屈し露國とサンステファノに和を結び、諸藩鎮の獨立を許せり、一千八百七十八年三月三日英國先づ故障を入れ、遂

に列國使臣を獨都に集め、所謂伯林會議を開く、露國は此會議にて全く孤獨の地位に立ち、止を得ず、前議を破壊し、國力を傾けたる大事は全く水泡に歸せり、露國の憤恨知るべきなり、

### 第十二章 三國同盟、露佛同盟、新三國同盟

普佛戦争の際普國の思ふが儘に戰勝を得たるは露國の後援あるによるなり、故に露國は伯林會議に於て普國の必き已に賛同するを豫定せしにビスマルクは知らざる真似して之に反対し、却て奧國の勢力を増し、露國の南進に備へしめられたれば、露は深く普國を怨めり、ビスマルクは則ち奧國と同盟し、更に佛國に對して恠々た

る以國を加へ、一千八百八十六年三國同盟を作り、獨逸は歐洲を睥睨せり、露も佛も孤立となりしが、勢兩國提携の必要を感じ、一千八百九十一年遂に露佛同盟成り、以て三國同盟に當れり、英國獨り超然、以て漁夫の利を占めんとす、然れども、奥國は到底深く頼むに足らざり、以國は財政紊亂亦倚るべからず、獨逸は則ち密かに露國に結托する所あり、日清戦争(一千八百九十四年乃至一千八百九十五年)の際露佛と同盟して新三國同盟を作り、以て我に忠告をなせり、是に於て舊三國同盟は有名無實となり、露國の勢力強大となり、獨逸は巧に其間に勢力を扶植せり、

### 第十三章 現代の文明

科學の進歩及其應用は現代に於ける文明の特徴にして進化論(ダーウキン)創説及勢力不滅説(マイエル)グロ  
ーブ創説の如きは科學上の二大新説と稱せらるる  
汽船汽車機械等は凡て蒸氣力の應用なり、電信電話電車電燈蓄音器等は電氣の應用なり、寫眞術は光線學の應用なり、應用は更に兵器、新聞紙、醫術、機械等に及んで其改良を促し、其他百般の事物目に面目を改めざるはなし、特に交通機關の發達は其著きものにして、スエス運河、大西洋海底電線、カナダ鐵道の如きは世界の距離を短縮し、現今工事中なるシベリア鐵道、中米運河等の

大成せん曉には世界の交通は一層の敏活を來すべし  
此の物質的進歩に伴ふて人道博愛の主義の普及する  
に至りしは現代の一大美事にして學校、病院、養育院、赤  
十字社、奴隸賣買禁止の如きは其好例と謂つべし。

# 中學西洋歴史終

明治三十二年十二月二十日印刷  
明治三十二年十二月廿四日發行  
明治三十三年五月廿六日訂正印刷  
明治三十三年五月三十日發行

定價金三拾五錢

著 者

廣 田 直 三 郎

東京市神田區猿樂町

發 行 者

來 島 正 時

大阪市東區備後町四丁目

發 行 者 兼 印 刷 者

石 井 鈎 三 郎

大阪市南區鰻谷東ノ町百七十五番屋敷

印 刷 所

周 擴 合 資 會 社 支 店

新刊書目

陸軍歩兵少佐大塚屯蔵字、菱村大助編述

●新撰器械體操書 完 定價金四十錢 郵税金八錢

本書ハ中學校師範學校等ノ學生用教科書トシテ編述シ現今陸軍ニ行ハル、器械體操ニ準據シテ學生ニ施ス教育ノ順序トテ稽合シ運動ノ種目ヲ詳設シ一舉一動毎一密圖ヲ加ヘ之ヲ細設セリ附録ニハ器械設計圖アリテ之レカ設備ノ便ニ供ス實ニ編者ノ用意ノ厚到ナル空前無比ト云フベシ  
文學士荻野伸三郎編纂

●中學東洋史 完 定價金五十錢 郵税金十錢

●中學東洋史地圖 完 定價金三十錢 郵税金六錢

本書ハ荻野文學士カ中學校程度ノ學校ニ於ケル東洋史ノ教科用書ニ充シカ爲シ、編纂セラレシモノニシテ專ラ文章ノ平易ト記事簡明トヲ主旨トシ東亞古今ノ大勢沿革ヲ編纂セシテ遺サス而シテ秩序整然タルコト中學科ノ目的ニ適合セルコトハ蓋シ近來遺教著書中最モ優勝ナルモノトス

●中等教育 皇國新史 完 關藤成緒編 定價金五十五錢 郵税金十錢

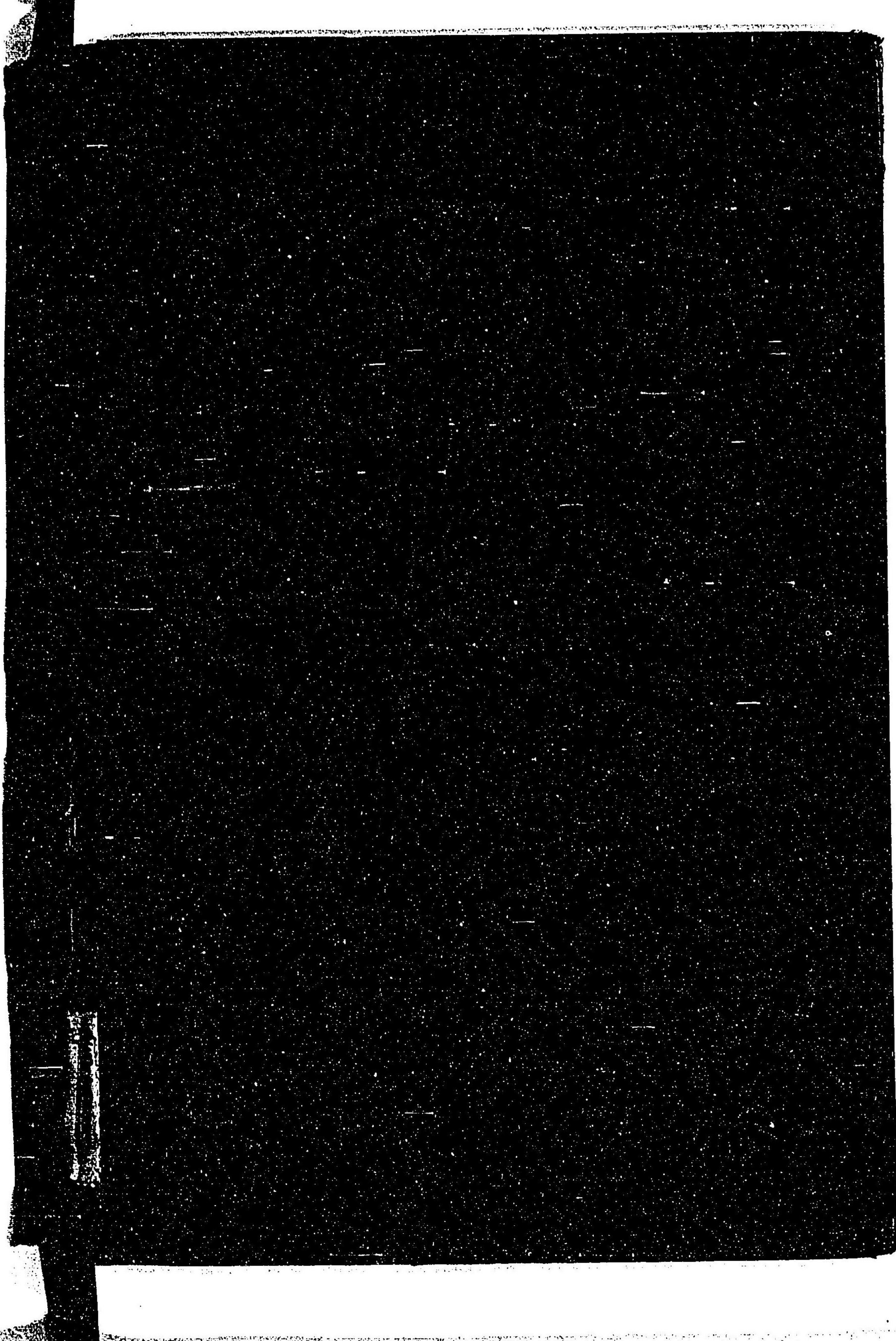
●新撰支那小史 完 全 定價金二十錢

●全附錄亞細亞小史 完 全 定價金二十錢



- 實驗博物學 完 理學士大谷津直麿編 全 金四十錢
- 新英會話 完 大谷津直麿編 全 金六十錢
- 幾何問題講義 全三冊 佐之井原甫編 全 各五十錢
- 算術原理 完 長澤龜之助編 全 各四十錢
- 算術問題の解方 完 全 各四十錢
- 全續編 完 全 各六十錢
- 中等教育用器畫法 全二冊 竹下富次郎編 全 各十四錢
- 漢文新讀本 馬場健編 近刊 全 各六十錢
- 英語讀本 齊藤三郎編 全 各六十錢
- 新撰用器畫法 竹下富次郎編 全 各六十錢
- 野外遊戲 アウトドアゲーム 野澤國雄編 全 各六十錢

88
3



88  
3

003708-000-9

88-3

中学西洋歴史

広田 直三郎/編

M33

ACD-0361



